1. 中島町笠師保地区の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4944

1. 中島町笠師保地区の概要

鹿 野 勝 彦

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 笠師保地区と各集落
Ⅲ. おわりに

Ⅰ. はじめに

金沢大学文学部文化人類学研究室では、2000年度の大学院修士課程1年生および学部3年生を主対象とした調査実習を、石川県鹿島郡中島町の笠師保地区において実施した。本報告書はこの調査実習の参加者が分担執筆したものであり、当研究室による調査実習報告書としては16冊目のものとなる[1)]。

調査対象地の選定にあたっては、まず1999年度に調査を行った中島町のなかで、実際の調査対象地区であった鉈打地区とは立地条件がかなり異なる、海岸部を含む地区を念頭に置き、町役場等の意見を参考として、笠師保地区に候補地を定めた。その後、5月から7月初めにかけての予備調査を通じ、地区からの協力を頂けるとの見通しが立ったので、最終的に地区全体を調査対象と決定した。

個々の集落ではなく、複数の集落を含む地区(笠師保地区の場合、6集落)を1つのまとまりとして調査対象とするのは、当研究室の調査実習としては、前年度に続き2回目のことだが、前年度の鉈打地区の場合と同じく、ここでも地区としてのまとまりがかなり強く、個々の集落規模もさほど大きくないこと(世帯数は最大の集落で100余、地区全体では300余)などから、対象の設定、調査の手法なども、ほぼ前年度を踏襲することとした。すなわち調査参加者は、あらかじめ地区内の特定の集落を分担するという形をとらず、地区全体を調査の対象とすることを原則とした。

報告集作成の方針も、基本的には従来のそれを踏襲し、本調査終了時までは調査に参加した院生、学生はあえて特定のテーマを定めず、対象地区、集落に関する情報、資料を包括的に収集し、個々に収集したデータは全体で共有することに努めた。参加者各自が報告書のためのテーマを決めたのは本調査終了後であり、その際には調査中に各自がはぐくんだ関心を優先している。以後の補充調査は、基本的には参加者各自が各々のテーマに関する情報を、必要に応じて重点的に集める形でなされた。ただし報告書の原稿を完成するまで、参加者全体での情報・意見交換のためのミーティングは、随時行った。

こういった経過を経たため、本報告書も、全体としては対象地区やそれを構成する各集落についての網羅的、体系的な記述とは、必ずしもなっていない。そこで序章としての本章では、笠師保地区とこれを構成する各集落についての立地、人口動態をはじめとする、最小限の一般的記述を[2]、また2章では地区組織についてのまとめを、さらに終章である16章では、地区、集落にとって最大行事である祭礼についてのまとめを、指導スタッフの責任で執筆し、院生、学生の執筆した各論の導入と補足を行っている。

Ⅱ. 笠師保地区と各集落

笠師保地区は中島町の南部に位置し、地区西部の標高150m前後の丘陵から東流し、七尾西湾に注ぐ笠師川、塩津川の両岸から海岸部にかけて立地する、筆染、下笠師、中笠師、上笠師、南側、塩津の6集落(区)より構成されている。しかしこれらの集落のうち、下笠師、中笠師、上笠師、南側の4集落は、もともと笠師という1つの区であった。藩政期の笠師保は筆染、笠師、塩津、大津の4村からなっており、明治に入って大津は金ヶ崎村に編入(後に田鶴浜町に統合)、その他の3村が笠師保村を構成することとなったが、1954(昭和29)年の町村合併により、中島町に統合された。このとき、塩津も田鶴浜に編入すべきだとの主張も一部にはあったが、結局現在の形に落ち着いたという経緯があり、現在でも筆染、笠師、塩津という区分は、地区の中でも一定のまとまりを持つ単位として機能している。

地区の西部は標高150m前後の森林に覆われた丘陵で、志賀町、富来町に接し、その境界に沿うように能登有料道路がのびているが、地区内にはインターチェンジが設けられてはいない。地区の北側には、この丘陵部から七尾西湾にむかってゆるやかにのびる尾根が、中島町の豊川、熊木、中島地区と、また南側は同じく志賀町、田鶴浜町との境界をなしている。また地区内を東流する笠師川と塩津側の間にも、標高60~70mの丘稜地があって、笠師と塩津とを分けるとともに、その東端は七尾西湾に突出した唐島の小半島(かつては海で隔てられており、藩政期に埋め立てによって陸続きとなった)につながる。地区の東側は遠浅の七尾西湾に面していて、現在の海岸部の水田も、埋め立てによって造成された部分がかなりの面積を占めている。2つの川は延長も短く、水量も豊富でないため、丘稜部の随所には大小の灌漑用のため池が設けられている。

この海岸線に沿って第3セクターの経営するのと鉄道(旧JR七尾線)と国道249号線がほぼ南北に走っており、地区の南端である塩津の南部には笠師保駅が位置している。鉄道駅から塩津川沿いに塩津集落を経て北西に転じ、笠師川上流部から再び北西に丘稜を抜けて豊川地区へ出る県道豊田笠師保線と、笠師川を海岸部から遡上し県道に合する町道、それ

に鉄道のさらに海岸よりを筆染、塩津などの集落沿いにのびる町道などが、この地区の主要な交通路となっている。集落はおおむね丘稜を背負い、海岸ないし河川に沿った平地、すなわち水田適地を前面にする列村の形をとっている、そして現在水田となっている海岸沿い平地のかなりの部分は干拓地であり、かつては集落と海岸線はより近接していた。

笠師保地区は中島町を構成する他の地区同様、旧行政村としての一定の単位性を保持しているが、その中心となるのは笠師の南側に置かれている公民館(笠師保構造改善センター)と、これに隣接し、地区を通学範囲とする町立笠師保小学校である。このうち公民館は、館として独自にさまざまな行事を実施するほか、地区を単位とする諸組織にその活動の場を提供しており、地区の生活の要としての役割を果たしている。一方、笠師保小学校は1873年に創立した笠師小学校を前身とし、1926年に現行の通学範囲を持つ笠師尋常高等小学校が成立して現在に至っているが、地域の他地区と同様、ここでも人口減少と高齢化、少子化の結果、児童数の減少が著しく、数年以内に中島町内の他の小学校と統合されることが、ほぼ決まっている。

地区内の主要な公共施設としては、他に郵便局と駐在所が塩津の笠師保駅前に、保育所が中笠師と塩津に設けられている。また中島町をその範囲に含むJA能登わかばの笠師保支所は南側に、七尾西湾漁業協同組合・漁村センターは塩津に位置している。地区内には商店は、笠師保駅前をはじめ国道沿いなどに散在しているが、商店街と呼べるほどのものではなく、買い物は中島町中島地区や田鶴浜町、さらに自動車による通勤が一般化してからは七尾市方面ですることが多くなったようである。

ところで中島町では、個々の集落を越え、しばしば10から20にも及ぶ集落を含むかなり広い範囲が一体となって維持する惣社(総社)と、そこへその範囲に住む人々が寄り集まって行われる大祭の存在が知られており、その範囲はおおむね旧行政村と重なり合うことが多いのだが、笠師保地区では笠師、筆染、塩津は各々別々の神社、祭礼の体系に組み込まれていることは注目に値する。詳細は16章で述べるが、笠師では4集落が中笠師の菅忍比咩(すがおしひめ)神社を惣社として祭礼を挙行するのに対し、筆染は豊川地区の豊山山王社を惣社とし、六保祭りに参加する。また塩津は唐島社と日面社の2つの神社を集落内に持ち、集落独自で祭礼を行うが、特に両神社の神輿が各々舟で七尾湾上へ繰り出す夏季祭礼は、能登においても特色あるものとして知られている。こういった神社、祭礼のあり方は、言い換えれば、他の地区でしばしば見られるような、地区最大の行事としての祭礼を挙行することを通じてそのまとまりが維持、強化されるといったことが、少なくとも笠師保地区という単位としてはないということを意味してもいる。このことは地区が日常生活にかかわる面では、一定のまとまりを保っているにもかかわらず、例えば鉈打地区でのように、地区を単位としてのいわゆる町おこし的なさまざまな活動をあまり活発に行っ

表-1　笠師保地区と各集落の世帯数、人口の動態

年度	笠師保地区			下笠師		中笠師		上笠師		南側		(笠師)		筆染		塩津	
	世帯数	人口	世帯平均人数	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
1889(明22)	290	1555	5.36	-	-	-	-	-	-	-	-	175	901	20	103	95	551
1920(大 9)	324	1549	4.78	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1930(昭 5)	317	1514	4.78	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1940(昭15)	297	1390	4.68	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1950(昭25)	354	1839	5.19	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
1954(昭29)	351	1790	5.10	-	-	-	-	-	-	-	-	199	1024	19	111	133	655
1965(昭40)	332	1503	4.53	-	-	-	-	-	-	-	-	180	845	19	101	133	557
1970(昭45)	325	1409	4.34	57	239	35	163	46	205	39	184	(177)	(791)	20	95	128	523
1975(昭50)	325	1354	4.17	55	230	36	162	45	189	42	163	(178)	(744)	21	95	126	515
1980(昭55)	330	1332	4.04	55	230	36	153	45	179	42	153	(178)	(715)	23	108	129	509
1985(昭60)	320	1312	4.10	54	232	37	171	45	173	37	154	(173)	(730)	23	105	124	477
1990(平 2)	314	1213	3.86	54	223	36	158	45	149	39	137	(174)	(667)	23	94	117	452
1995(平 7)	302	1110	3.67	52	211	34	143	43	144	36	126	(165)	(624)	23	81	114	405
2000(平12)	311	1133	3.64	51	204	34	149	49	158	38	136	(172)	(647)	24	89	115	397

1889~1954　『中島町史・資料編　下』　中730、732
1965~1995　国勢調査　『市町村地区別人口および世帯概数』
2000　町役場資料(2000.4.1現在)
世帯平均人数は以上をもとに算出

ていないように見えることと多少とも関係しているのかもしれない。

地区の世帯数と人口の動態は、表-1にまとめた通りである。ここからは世帯数、人口ともに1950年前後に最大となり、以後世帯数は漸減して最大時の85%に、また人口は最大時の60%程度にまで減少していることがわかる[3]。こういった傾向は町全体、あるいは町内の他地区と、おおむね一致しており、それはまた過疎化、高齢化に伴う諸問題が、この地区で共通していることを意味しているが、一方では集落レベルでの差異も存在しないわけではない。例えば1965年から1995年にかけての30年間に、世帯数、人口がどれだけ減ったか(表の上では、どれだけ残っているか)を集落別(笠師の4集落については、個々の集落別数値が1970年以降しか得られないため、まとめて)に見ると、表-2のようになる。なお表-2には鉈打地区の同様の数値を、比較のために示してある。鉈打地区においては、とりわけ山村的な集落で、世帯数については70~60%、人口については50%以下という数値が見られたのに対し、集落の多くが海岸部に立地する笠師保地区では、地区全体としても集落レベルでも、その数値は鉈打地区のそれをかなり上回っている[4]。ただ、その中で鉄道駅もある塩津がなぜ他の集落より世帯数、人口の減少傾向が著しいのかについては、これだけでは説明がつかない。

地区を構成する各集落の性格とその変化を示すものとして、農業センサスに基づき、いくつかの指標について集落ごと(笠師については農業集落カードの単位をもとに笠師の4集落をまとめて)の1960年から1995年にかけての数値をまとめると表-3のようになる。表-3からは笠師の各集落の個別資料が得られない、漁家についての1970年以降の数値を欠くなどの問題があるが、聞き取り調査と合わせて、集落ごとの特徴をある程度読み取ることが可能である。

筆染は地区の北端の海岸部に位置するが、集落規模は地区内で最も小さく、地区全体にかかわる公共施設や商店等も存在せず[5]、また先述のように祭礼も豊川地区の六保祭に参加するなど、地区の中ではやや周辺的な位置にある集落だが、それだけ集落としてのまとまりが強固な面もあるといえる。総個数に占める農家の比率は相対的に高く、かつ2種兼業化の進行も比較的遅かったし、ここでの農業の基幹をなす水稲耕作の前提となる水田の、農家一戸あたりの平均所有面積も、笠師、塩津に比べてかなり多い。また漁家の比率も高く、その点はカキ養殖が主要な漁業の業態となっている今日まで継続している。すなわち筆染では2種兼業農家のうちのかなりの世帯は、現在も主たる収入を漁業によって得ているのであり、農家の大半が通勤賃労働からの収入が主たる収入源になることによって2種兼業化したり、さらにその一部が、主たる収入を得ていたものの定年退職によって再び専業農家化するといったプロセスをたどった、多くの農村集落の場合とは異っている。こういった生業の特徴が、この集落の世帯数、人口の、他の集落に比べて安定したあり方

を支えていると推測できよう。またカキ養殖という業態は、主に冬期のパート労働という形で、周辺地域に対して一定の雇用を創出していることも付け加えておく。なお、1990年時点でも世帯の35%弱は一応林家となっているが、その所有面積は、すべての林家で1ha以下ときわめて零細であり、林業が重要な意味を持つことは、ここではほとんどなかったと言ってよい。

表-2　笠師保地区と集落の世帯・人口残存率(1965-1995年)

	笠師保地区		笠師		筆染		塩津		鉈打地区	
残存率	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	人口
	91.0	73.9	91.7	73.8	121.1	80.2	85.7	72.7	83.2	62.1

1965年の数値を100として1995年の残存率(%)
国勢調査による

表-3　笠師保地区集落の農・林・漁業

集落名	年度	総戸数	農家数	農家率	専・兼業分類			農家平均水田面積*	林家数	林家率	漁家数	漁家率
		A	B	B/A×100	専業	1兼	2兼		C	C/A×100	D	D/A×100
笠師	1960	189	172	91.0	30	76	66	62.5	122	64.6	24	12.7
	1970	180	158	87.8	6	31	121	68.9	96	53.3	-	-
	1980	176	149	84.7	6	11	132	64.8	91	51.7	-	-
	1990	175	132	75.4	8	9	115	69.0	87	49.7	-	-
筆染	1960	19	19	100.0	2	15	2	100.3	17	89.5	13	68.4
	1970	20	19	95.0	0	10	9	102.6	14	70.0	-	-
	1980	23	19	82.6	1	0	18	101.5	11	47.8	-	-
	1990	23	18	78.3	1	0	17	89.1	8	34.8	-	-
塩津	1960	131	98	74.8	12	54	32	54.3	76	58.0	32	24.4
	1970	127	84	66.1	2	22	60	60.6	62	48.8	-	-
	1980	126	76	60.3	2	6	68	60.8	64	50.8	-	-
	1990	123	72	58.5	3	0	69	60.5	65	52.8	-	-

*　単位：アール
農業センサス　農業集落カードによる

塩津は地区の南部に位置し、集落としては規模も大きく、海岸部の久々浦(クグラ)、下前、二切(フタギリ)と、やや内陸部に入った柳浦(ヤナウラ)、中組、上組などの小字(垣内)から構成されており、祭礼は塩津単独で独自の伝統に基づいて行われている。ここでは農家そのものの比率は、地区内の他の集落に比べてもともとやや低く、2種兼業化は割合早くから進行しており、水田の平均所有面積も比較的少ないことが確認できる。また海岸部の垣内には筆染同様、半農半漁の経営形態をとる漁家も多く、そこでは漁業が主な生業と

なっている場合もある。これに対して内陸部の垣内の世帯を主として1ha以上の山林を所有する林家が1990年時点でも全世帯の30%強あり、その一部は5haを超える山林を所有しているなど、農山村的性格も一部には存在する。

またその一方では、海岸部には唐島や塩津海水浴場などの観光資源があること、鉄道駅があるために、自動車通勤が一般化する以前から通勤や商店経営などを行うには有利な条件に恵まれていたこと、など、地区内の他の集落とはやや異なる条件が存在する。こういった、地域外との多様なつながりの可能性が早くからあったことが、逆に塩津での人口流出を促進した一つの要因であったのかもしれない。

笠師は旧笠師保村の中心集落であり、役場が置かれていた。今も小学校、保育所、公民館、JA支店、若干の商店、歯科医院などの諸施設があるほか、かつては小規模ながら繊維関連の工場も、かなりの数が操業していた。ただ繊維工場については、現在は一軒を除き廃業している。これらの諸施設のほとんどは、鉄道線路の西側の、笠師川沿いに立地している。ただ主たる交通手段が自家用乗用車となり、人々の行動圏が著しく拡大するとともに、国道沿いから外れた笠師川沿いの地域の、地区の中での中心性は失われてしまったといえそうである。

笠師を構成する集落の中では、下笠師と南側は海岸寄りに位置し、その中にはやはりカキ養殖を主に行う半農半漁家が、比較的多く見られる。これに対して笠師川沿いの中笠師、上笠師には漁業に従事する世帯はもともとほとんど存在せず、田の所有面積も平均的にはさほど大きくないが、大部分が山林を所有しており、少数ながら20ha以上を所有世帯もある。かつてはこれらの集落には山林地主以外にも、炭焼き、木挽き大工等を職とした人々もいたとされているから、ここでは一方では農山村的な性格がかなり強い集落だったとも言えよう。笠師はこのようにかなり立地も生業構造も異なる4つの集落から構成されている一方で、1960年代半ば過ぎまでは地区内の一つの集落として認知されていたし、また今日でも菅忍比咩神社を惣社とする祭礼の執行単位として、地区内の地区ともいうべき性格を維持し続けている。

笠師保地区は全体としてみた場合、中島町内の旧行政村を単位とした他の5地区に比して、世帯数、人口、集落数のどれをとっても最小であり、面積も広いとは言えないが、環境、立地条件やこれを反映した生業のあり方、さらには集落の構成や運営のあり方などは、かなり多様である。

ただ近年の急速な経済、社会変化は、農業、林業などの衰退、通勤賃労働への依存の拡大と限界、これらの条件の下での過疎化、高齢化といった状況の下で、地区内の多様性を解消し、均一化していっているようにも見える。こういった諸点については、以下の各論の随所で取り上げられることになろう。

Ⅲ. おわりに

例年のことであるが、本報告書の大部分の章は、現地調査自体も、また調査で得た一次資料に基づいて報告を作成することも初めて経験する学生が執筆している。本章の冒頭で記したような調査実習の方針もあって、調査に参加したメンバーは調査の段階ではできる限り多くのかたがたに多方面に渡るお話をうかがい、また実際にもさまざまな分野に興味、関心を抱いてきたのだが、実際の報告書においては、それらのうちのごく一部しか利用することはできなかった。またその記述や分析においても、執筆者、指導者の力の限界から、不十分なものになっており、多くの誤りも犯していると思われる。

調査にご協力いただいた各位には、あらかじめその点につきお断りするとともに、忌憚のないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

注

1) 既刊の報告書の一覧は、巻末の「参考文献・参考資料」を参照されたい。

2) 中島町の概要については1999年度の実習報告書『中島町鉈打地区』で記述した。

3) 一般にこの地区を含め、いわゆる過疎化の進んでいる地域では、住民票に基づく役場資料の数値は、その時点での居住実態に基づく国勢調査資料に比べ、数値が大きくなる傾向がある。表-1にもその傾向が見られるようであり、1995年から2000年にかけて、地区の世帯数、人口が実際に増加したとは考えにくい。

4) 『中島町鉈打地区』、2000、4-5。

5) 筆染の集会所自体も2000年3月に完成したばかりで、それまでは区としての集会等も個人宅で行われていた。